

文化高知 29

国道整備と明日の高知

佐藤 幸男

播磨屋橋に立つ。北へ進めば、高松に至る。東へ進めば、室戸を経て徳島に至る。西へ進めば、松山あるいは中村に至る。そして南へ進めば、桂浜の向こうに太平洋がある。播磨屋橋は、高知の商業の中心地であるとともに、自動車交通の中心地でもある。

反面、高知市の幹線道路は播磨屋橋に一点集中しているともいえる。高知市は鏡川沿いの南北に狭い平地部に発展してきた。このような地形状況にあつて、一点集中型の幹線道路網が形成されたことはいたしかたないことであろう。

しかし、このため、播磨屋橋をはじめとする中心市街地の幹線道路の各所で、あるいは郊外から市街地への入口となる幹線道路の各所で渋滞が慢性化している。そして、幹線道路の渋滞は、日常生活道路の渋滞まで引き起こしている。

市内の渋滞を緩和するためには、通過交通を排除すること、市内へ流入する交通を複数の道路に分散させることが必要である。バイパス、環状道路がこの役割を果たす。

国道バイパスの整備は、南国バイパス、高知東道路といった高知市の東部地域の計画がほぼ完了した。今後は、高知西バイパス、春野拡幅といった西部地域の整備に勢力を傾けていくこととなる。また、土佐道路、筆山道路は



「一文橋」 片木太郎

市内の内環状道路という位置付けで事業を進めているところある。

さらに、四国横断自動車道、高知東部自動車道といった高速サービスを提供する高速道路、自動車専用道路も、市街地を通過する交通を排除するとい

う意味では、バイパス、環状道路と同等の機能を持つ。

これらの幹線道路、特に環状道路が整備できれば、播磨屋橋を中心とする市内の東西軸、南北軸の交通混雑を緩和することができる。東京の銀座では決して見られない中心市街地の真ん中をダンブカーが通過するという光景もなくなる。このとき、東西軸、南北軸は高知市のシンボルロードとして生まれ変わる。

電線の地中化、歩道舗装のデザイン化、街路樹の質的向上、ストリートフアナチュアの設置などの修景整備を合わせて行うことにより、人間中心の道路が誕生する。

幹線道路の整備が完了していない現在、交通量が多く、人間中心の道路とは言えないが、東西軸、南北軸が高知市民のシンボルであることに変わりはない。したがって、電線の地中化などできることから、明日のシンボルロードを実現させていくことも必要であろう。

(建設省四国地方建設局

土佐国道工事事務所長)

香りの思い出

矢野雅章

神宮外苑の近くから箱根・明神山麓の雑木林に居を移して、二十年。花の咲く樹を残し、その中には自生の山桜が拾数本ある。

同じ山桜でも花の咲く順番があつて、この二十年間狂つたことがない。庭のほぼ中央、こぶしの隣の山桜が咲く頃に、高知に開花宣言が出される。

我が家には染井吉野は一本もない。その代りに土佐水木と三極を植えた。だからいつも檀香梅とやぶ椿、土佐水木、三極の花が競演となる。毎年送られて来る土佐文旦を味わいながらのお花見だが、今年は土佐水木の花が意外に少ない。異常気象のせいだろうか。

「五月連休前に筍が掘れるかしら」と浅草の友人から電話、まだだつたら鯉のタタキをお願い、と言うのだ。庭の一人静、一輪草が咲いてからでない、うちの孟宗の匂は出ない。昨年はずいぶんスペインに出掛けていたので、知らない。今年はずいぶん豊作のはず、と家人は言うがどうだろうか。

近所に家が密集していないせいもあって、鯉をあぶるのに藁が燃やせる。未だに私は藁の香りにこだわり、香りもタタキの要素と思っている。

沈丁花の香りで上野の美校の入学試験を想い出し、美顔クリームの香

りで亡き母を想い、オリブ油の香りでバレンシアのパエリヤを連想、チヨリソウの匂いでセゴビアが浮ぶ。

密閉された新幹線の車両の空気と、タクシーに残つた煙草の匂いはいやなものだ。自分が煙草を吸うのに、他人の残り香はどうも具合が悪い。身勝手なものだ。スペインで腋臭に香水をプンプンさせたご婦人とバスで同席したことがあるが、その強烈なものには頭が痛くなった。

どちらかと言えば私の嗅覚は敏感だと亡き母によく言われ、台所で食事の準備をする母にアレコレ注文をつけて叱られたものだ。

高知の香りで高貴な匂いのする爽やかなものがある。誰に出しても、悪く言われたことがない。五月頃から出回る小夏である。いろいろと工夫、加工品も出ているようだが、小夏そのものの右に出るとは思われぬ。何とか量産して国中席巻してもらいたい。

私の仕事場に赤ん坊の頃から出入りしている隣のお寺の女の子が居る。先日お寺でお茶をよばれた時に、そばに寄つて来て「おじちゃんはおトリエの匂いがする」と言われた。一日中仕事場に入り放しなので、解き油と煙草の匂いがしみ込んでいるのだろう。老臭が漂いはじめたかもしれない。年寄りの部屋はよく漢方薬

の香りがあるし、どこの家でも固有の匂いのするものだ。

私は高知ではホテル住まいなので、特別買出しをするわけでもないが、大橋通りなどを見て回るのが好きだ。季節の品物が溢れていて、高知の匂いがする。旅をすると必ず市場を見るが、土地によって微妙に匂いが違う。スペインではうなぎの蒲焼きの匂いが、夢の中にまで出て来た。人間も職業の匂いが、しみついていくらしい。

私も年毎に体力の衰えを自覚。最近視力に障害が出て、今までの肉眼に頼り過ぎを、心眼も使うことになった。人間には五感がある。身体全部で感じないといけない。通り一遍の見方では、真実は解らない。ややもすると時流に流され、コモシヤルに踊らされ、ムードに酔い、目の先のことにとらわれて、本質を見失いがちだ。幸い高知には龍馬、慎太郎、万次郎といういいお手本がある。

いつもは十二月に帰高しているが、今年は長雨の頃、急ぎの仕事もないので、豌豆のお汁や、土佐のトコロ天を味わいながら、ゆつくりリフレッシュしたい。人間生まれ育つた土地に帰ると病気が治ると、誰に言われたか記憶はないが、今から遠足を待ちかねている小学生のような気分である。(画家・光風会会員)

出来、遂には品切れ、あとは「機械打ち乾そば」で辛抱を、となるのだが、過去に本物にありつけなかった「残念」が却って人気を呼び、今年は三日間で二万人が入場した。人口の二十倍近い。

「史上最高です。寒さ凌ぎにと体育館を会場にしたこともありましたが、三年前から豪雪を逆手にとり、

たのも、「合掌家屋の保存」という情報発信だった。

ところで、この取材のきっかけは、デスクに届けられた一枚の広報紙だった。B4版ワープロ印刷の裏表、たった一枚。富山県広報課の「トヤマ・ジャストナウ」という月一回発行の機関誌で、全国のマスコミ向けとか。県の提供する資料をもとに、委託先のタウン誌のメンバーがレイアウトする。三カ月くらい先までの催しなどを、簡潔な文章で紹介していてナルホドと思わせる。

「部厚いものは読んでくれないし、ニュースペーパーという感じで新しいものを盛り込んでいます。まず「発信」ですよ」と広報課。さすが、薬屋さんのふるさとだけにPR上手だ。われわれは、十二月号に載った「そばまつり」の釣り針にかかったわけだが、釣られ甲斐はあった。

その一月号に、富山市制百周年記念イベントの紹介があった。先日体験した、高知市制百周年記念の式典やパレード、その他の関連事業、一〇一人委員会による民間主導の高知方式などを考え合わせると「うちも内容では負けていないゾ」と思う。だからこそ、この高まりを情報として全国に「発信」しなければ……。(高知放送・顧問)

ラジオ番組「誰のもの・国民休暇県」の取材で、相棒と共に富山県利賀村に足を伸ばした。JR富山駅から高山線で越中八尾まで行き、そこから利賀村営バスで村の中心地まで、合わせて約二時間。岐阜県境に近い合掌造りの民家で知られた五箇山地区の人口千二百人、ダムもあり平家伝説もある、物部村を思わす山奥の村である。

二月十日から三日間、村の総合グラウンドで開かれた恒例の「利賀そばまつり」。「そば」で一体どんなまつりができるのか、期間中二万人近い人が訪れるその魅力は何か、などを探ることが目的だった。

例年なら三メートルの積雪を掻き分けて会場をつくるそうだが、暖冬の今年はこも雪不足。雪像は勿論、八千平方メートルのグラウンドにも雪を敷きつめなければならず、ダンブ八百台分の雪を掻き集めたとか。白一色の会場には、札幌雪まつりよろしく、二十二個の雪像が立ち並び、それぞれの立て札には、利賀中学校、森林組合、農協、村議会、はては、役場一階、役場二階などと制作グループ名が書き記され、大小いくつのかのカマクラには小学校、老人クラブの名前まであって、村民総出で取り組む喚声が聞こえるようであった。また、会場の舞台や中央の広場では、

全国にPR発信

小椋 克己

〇%の手打ちそばが主役。ねばり気が少なく機械に掛かりにくいので「一〇〇%手打ち」。実演披露も兼ね、隣り合った体育館で打ち出していたが限界があり、「限定一万食」と、予めパンフレットにも刷り込み、会場にも看板があった。

人の心理は「限定」という葉味が弱く、そのテントには常に長い列が

雪の中で食べるようにしたら、それが当たりました。やはり、情報発信です。お客さんの口コミも含めて……と村長さんの表情は明るい。この村は、八月上旬に約十日間開かれる演劇の催し「利賀フェスティバル」でも知られ、十年の歴史が期間中二万人の村外客を呼び寄せることに成功している。このもとになっ

今から六年前に始めた絵画のシリーズは、「イメージの予感」または「PRESENCE OF IMAGE」と題し、一口に言えば、時間の中に存在する己自身、自然、キャンバスのかかわり合いを追求しているものです。

真つ白いキャンバスを目の前にしてボクの根本的態度というのは、キャンバスそのものを一つの生命を持った呼吸する人間、或は子供、言いかえればボク自身と対等にこの世界に存在するものとして見ることです。そのことを踏まえてボクとキャンバスの相対的接点を見つけよう、追求してみようというところから始まります。

しかし、キャンバスという平面は、時間という枠を遠く越えた永遠的なもの、絶対的なものであるのに対して、時間の中で絶えず流動するボクの心とは、なかなか共通点、接点を見つけ出すことは難しいものです。

第二次大戦以降、アメリカ、ヨーロッパの多数の芸術家達は、この問題にいろいろな実験的方法を持って取り組んできました。(ある批評家達、芸術家達は、これを「時間と空間に関する問題」とも言っています) ロバート・ロージェンバーグ、マーク

・ロスコー、ソル・リュイット、アド・レインハート etc. 数えればきりが無い程の芸術家達がこの接点を見つげようと、努力をしてきました。ボクもその中の一人で、ただ一かけらの石ころのような者だと思っ

ています。

絵画の上でキャンバスに残っている色、線、面に対して、時間の中で刻々と変化していく自分自身を見つめると、相対と絶対、普遍と実存といった、あまりに大きな溝を痛切に



IN EARLY SUMMER

時のはざま

SEE
西悟

(ビジュアル・アーティスト)

感じ、恐怖さえ感じてしまうのです。一本の線を描いても、一つの色を塗っても、わずか一時間後にはボクの心の中に「いや、この線は今の自分ではない。いや、この色は今のボクの思っているものとは違う」という懐疑心が芽ばえてきます。時間の中で生きているボクの経験というものがキャンバス上で定着せず、平面と己の接点が見つけられなくなってしまうのです。さらに、ボクがこうであるべきだと断定しても、必ずその裏に相反する自分自身の影が存在するのを知り、キャンバスの永遠的平面に対して、ますます大きなギャップを感じてしまうのです。

こういった問題に対して制作上でボク自身を刺激した思索とは、キャンバス上に、ボクと平行して物理的、精神的な時間の推移を植え付けてみてはどうだろう、ということでした。つまり、時間の流れの中でボクが少しずつ体験し変化すると同様に、キャンバスの線・色・面も少しずつ体験として変化させ、一方、ボク自身の中に経験として残っていくものは、キャンバス上にもキャンバスのもつ経験として残してみよう、ということでした。

これを解決することにおいて、さまざまな方法を指摘することができると思います。ボクにとって、この

材料を使いこなせばもしかして、と思ったのが紙でした。

案の定、紙はボクの作品に大きな変化を与えてくれ、可能性ということにおいては、尽き果てぬ夢のようなものを感じさせてくれました。今、なお紙を使って更に驚かされ、

もっと勉強しなくてはと新鮮な気持ちにさせられます。現在のボクの絵画には、なくてはならない存在となつてしまいました。

紙とアクリル絵具の混合をキャンバスに何層にも、繰り返し繰り返し塗り重ねていくことによって、平面

は紙のもつ柔らかさを保ちながら質感、量感が増してきます。その間に、紙の層をスクラッチ(引っかき)、スクレイプ(けずる)、サンディング(磨く)、時にはドリッピング(しずくを垂らす)の作業を混ぜ合わせることによつて、紙の層の断片を知り、キャンバスの持つ時間の推移が、所どころに見え隠れしてきます。

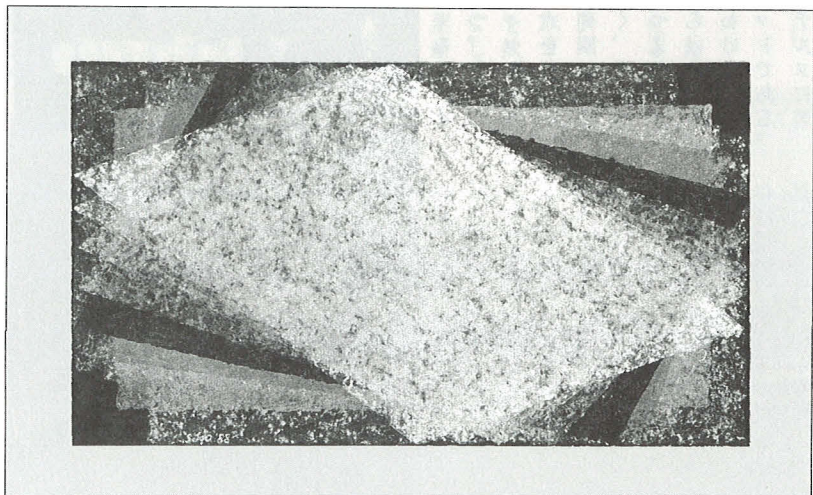
この単純な作業の後、キャンバス上には時間の推移の試行錯誤が生まれてきます。言いかえれば、キャン

バスにはボクと相対する経験、供えた平面そのものが誕生します。ボクはそれをキャンバスに、空間と時間の中にあるトリプル・E.X.が生まれたと言います。それは

EXPERIENCE (経験)
EXISTENCE (存在)
EXPECTATION (期待)

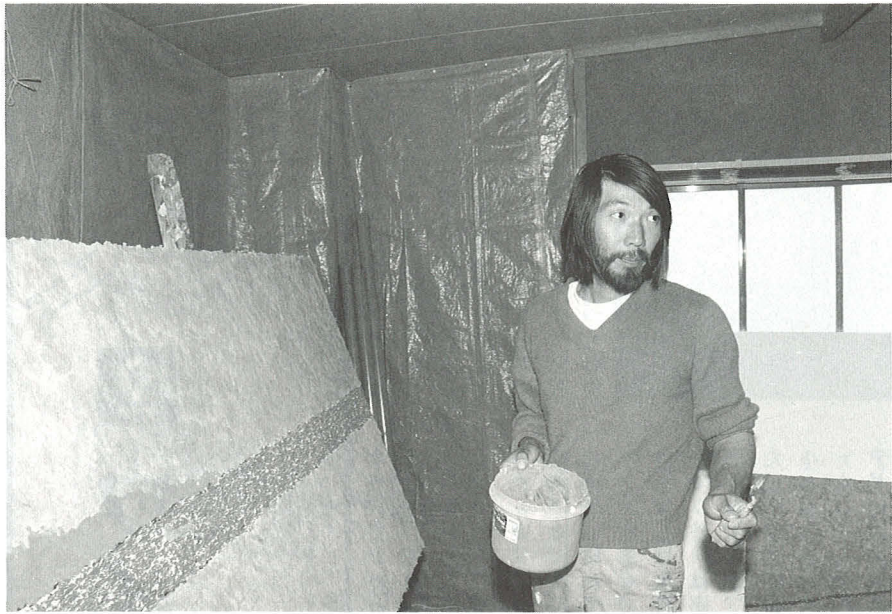
人間というのは、経験をもち、存在していることを知り、期待する心を持つ動物ではないでしょうか。ボクはキャンバスにこのトリプル・E.X.を感じ、はつきり鼓動が聞こえてくるとアトリエを離れます。でも、それは完成した作品とは呼びません。逆に一人立ちした作品といえます。もう手のほどくしようになく、ボクから完全に独立した存在だと認めるのです。

こういった過程を踏まえて発表される作品から鑑賞者は何を読みとるかボクには分かりません。でも何かを感じ、「あれっ」と思う時があれば、それはキャンバスとボクと鑑賞者の間に何か一つの接点が生まれた

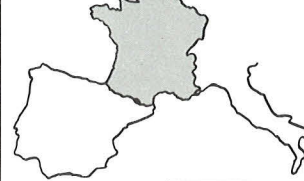


IN THE SPACE

時ではないでしょうか。そして、各々がそこから何かを思索し、想像し、イメージをふくらませていくのではないのでしょうか。それは、子供が空に浮かぶ雲を見て、「あれはうちのお母さんの顔だよ、あっちのはお父さんだね」と頬を紅潮させて叫ぶように……。

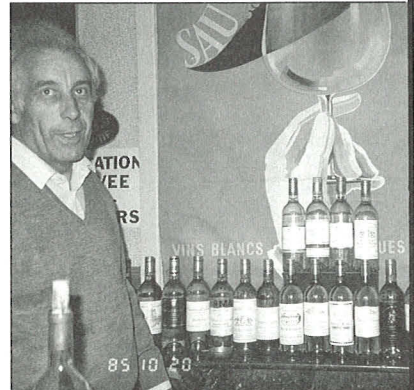


フランス1周 1万キロ



2 ワイン産地の旅

小笠原 真一



上:ピエール・メスリエ氏とソーテルヌ・ワイン下:カーブ(貯蔵庫) 檜の木で作った新酒の樽

フランスのワイン産地は、ほとんど国全体を覆うように広がっていて、その主なものを結んでゆくだけで、お誂えのフランス一周旅行が出来上がる。しかも、フランスの葡萄栽培というのは、ギリシャ・ローマ時代にさかのぼる古い歴史を持つもので、私たち日本人が行ってみたいと思うような名の知れた町や村のほとんどすべてが、これらのワイン産地とならんかの密接なつながりをもっていて、ワイン産地の旅と、フランスの主な見所を訪ねることとはほとんど矛盾することがない。

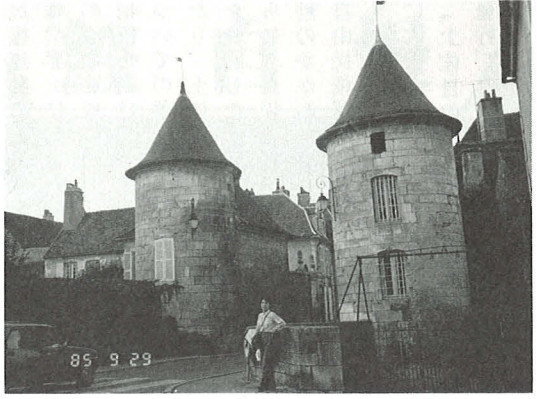
有名ワイン産地にはたいていそのなかの町や村を訪ねて回る観光コースが設定されている。たとえば、アルザスではルート・デュ・ヴァン、ブルゴーニュではルート・ド・グランクリュ、また、日本でもすっかりお馴染みになったボジョレーでは、ルート・ド・ボジョレーなんて名前

がついていたりするわけだけれど、そうやって訪ねる町や村の、たいていは何軒もある酒商や醸造業者の多くが、(ヴァーントウ・エ・デギュスタシオン)つまり(直売および利き酒)とでもいうような看板をあげていて、訪ねてくる人に、自慢のワインを飲ませて売っている。利き酒はしばしば無料。また、買ったところでワインは安い。シャンパンメーカーなどでは、地下に掘り広げられたセラー(貯蔵庫)を見学するツアーもついている。

もっとも、(ヴァーントウ・エ・デギュスタシオン)の旅はフランス中どこにもある。なにも葡萄酒に限らず、コニャック、アルマニャック、ノルマンディーのカルヴァドス、ベネディクトインなどのリキュール、そしていろいろなフルーツ・ブランデーと、いかにもフランスは酒の国である。

がしかし、ボルドーへ来ると、それも一味違った趣きを持つ。というのは、シャトー・ヴィズイットという、他とは少し違った形式をとるからである。ボルドーの葡萄園は、ひとつひとつが比較的大きく、それぞれに、その中心となる館つまりシャトーを持っている。私たちはそのひとつひとつを訪ねて回るわけで、つまりシャトー・ヴィズイットである。土曜日の午後遅くソーテルヌに着

いた私たちは、どうにか手近にある二つのシャトーを駆け足で訪ねることができたものの、行ってみたいシャトーのほとんどを見残したまま、シャトー・ヴィズイットには絶望的な日曜を迎えてしまった。そこでしかたなく、デギュスタシオンでもできれば儲けものと村のメゾン・デュ・ヴァン(ワイン組合)を訪ねたわけだが、なにぶん寂しい村のこと、見たところ、何とも風采のあがら

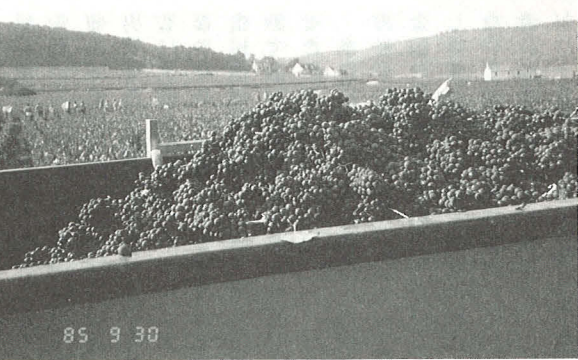


シャブリの街の入り口

い様子である。中に入ると、スナックと売店と事務所が一緒になったような室内があって、おじさんが一人、デギュスタシオン・カウターにもたれてクロスワードパズルをやっている。デギュスタシオンを申し込むと、「ジェロームが帰るまで、少し待ってくれ」という。がしかし、彼のパズルはここまでで、「あんだ、どこから来たね」ということになった。ほとんどなくジェロームが戻り、一杯ついでくれて、さらに話は続く。やがて、私たちの事情がすっかり飲み込めると、おじさんは言った。「よかつたらうちのシャトーへ来な

いよ 遠慮がちな私たちの態度に、おじさんはさらに言う。「今日は息子の友達のアメリカ人も来ているし、よかつたら、電話して迎えに来させるよ」

結局、私たちは、彼のシャトーで、彼の家族やアメリカ人の友達とワインテージを飲んで午前中いっぱいを過ごし、さらに、思いがけなくお土産までいただいたしまったのだ。この親切なクロスワードパズルおじさんというのが、なんと、かのシャトー・ディケム



ブルゴーニュのブドウ園

フランスの主なワイン産地

- ①アルザス
- ②ジュラ
- ③シャンパーニュ
- ④ブルゴーニュ
- ⑤コート・デュ・ローヌ
- ⑥プロヴァンス
- ⑦ラングドック・エ・ルーシヨン
- ⑧ロワール川流域
- ⑨コニャック
- ⑩ボルドー
- ⑪西南地区
- ⑫アルマニャック

のメイトル・シエ(醸造全般の責任者)にして、シャトー・レモン・ラフォン・オーナ1、ソーテルヌ・ワインづくりの第一人者であるピエール・メスリエ氏、その人だった。

ワイン産地の旅は、季節を選ぶと面白い。ワイン祭の時とか、収穫の時。私たちのこの旅行は秋の収穫時だった。町という町、村という村が、甘い葡萄の匂いを発して、それはもう、何とも言えない濃密な大気の味だった。

葡萄畑も愉快だ。年に一度の収穫は、家族総出で、季節労働者や学生アルバイトも動員する。みどりの畑に色とりどりのシャツの花が咲き、

車をおりて、畑の奥のほうにいる彼らに手を振ると、ワーッと一斉に、手に持ったバスケットやらバケツやらを差し上げる。とにかく明るい。ところによっては出来初めのワインをくれる。

「どうだい、一杯やらないか」

醸造槽から汲み出したそれは、ほの甘く、生き生きとした、蜜のように舌にからまる、甘いキスにも似た不思議な葡萄酒。ワイン産地の旅は、ふだんの食卓では得られない、新しいワインとの出会いを約束してくれる。(フランス料理店経営)

土佐自由民権研究の 現段階

公文 豪

昨年（一九八八年）十月、外崎光広著『土佐の自由民権運動』（高知市文化振興事業団発行）が、近代史に携わる全国の研究者のあいだで極めて高い評価を得ている。本書は、氏の三十年に及ぶ土佐自由民権研究の集大成のひとつであり、土佐自由民権運動の再評価を全国の「自由民権学界」に問いかける刺激的な内容のものとなった。発刊以来、本書の指摘を受けて、土佐自由民権運動についての誤った見解を率直に訂正したり、土佐自由民権運動への再認識を表明した研究者は少なくない。さらに、土佐特有の農地制度と民権運動のかかりなど、あらためて土佐自由民権運動について再検討を促すきっかけをつくりだした意義には実に大きなものがある。これに先立つ『土佐自由民権資料集』（同事業団発行）と共に、本書によって高知県の自由民権研究は全国的水準に達し、

その科学的検証にも耐え得る段階に到達したといっても過言ではあるまい。

外崎氏が、これまで県内外で発表された土佐自由民権関係論文に対し、手きびしい批判を加えてきたことはあまりにも有名だ。この点について、外崎氏は本書序文に「真理を求め、学問の世界ほど假借なく対立し合ひながら、しかもあまねく協力し合うものはない」という遠山茂樹氏の言葉を引用し、自らの学問的立場を明確にしている。

かつて、色川大吉氏が、明治十七年に秋田県で四百余人の自由党員が登録されていた例をあげ、「日本で最大の自由党員を持ったのは秋田県です。板垣退助の地盤じゃこんなくないんです」と地元で媚びた講演を行ったことがある（『秋田の自由民権』秋田文化出版社発行）。およそ学者とも思えぬ噴飯ものの発言だ

が、長い間、土佐の自由民権運動は土族民権・上流民権とか、「立志社」愛国社の潮流が民権運動の主流だという説は訂正されなくてはならない」などという評価が民権研究の大家の言葉として流布されてきたのが全国的な実態であった。

こうした土佐自由民権運動の曲解に対して、高知県の研究者はどんな反論を加えてきたのだろうか。自由民権発祥の地・高知県では、これまで自由民権運動についての論文があまりに発表されてきた。しかし、大半は「お国自慢」・偉人顕彰的内容のもので、史実の検証など、研究者としての初歩的努力の形跡さえうかがえぬものが少なかつた。豊富な史料を持ちながら、長足の進歩をみせた全国的民権研究の到達点を視野にも入れない「牧歌的研究」に自己満足している県内研究者の怠慢に業を煮やしてきた氏の心情は察して余りある。したがって、本書においても、土族民権論・土佐人気質論・維新勤王運動継続論など非科学的議論は徹底的に批判されることになるのである。

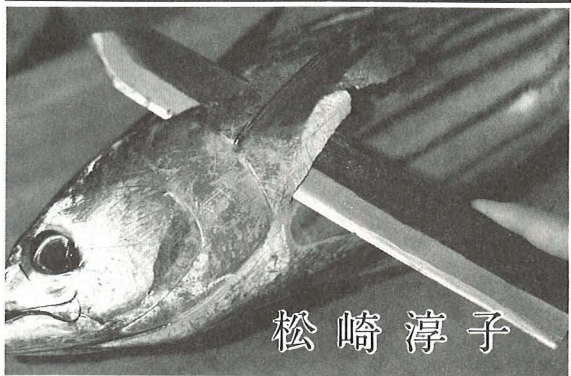
目下、土佐自由民権研究会は、五年の歳月を費やして『土佐自由民権運動日録』の編纂を続けている。この作業を通じてわれわれが驚いたのは、自由民権発祥の地にふさわしく、

土佐の自由民権運動が全県に裾野を持ち、これまで明らかにされたことのない民権結社や夜学が県下各地にくまなく組織され、今日では忘れ去られた優れた民権運動家や地方活動家が数限りなく存在することである。その階層は決して土族だけでなく、豪農商はじめ小作農民・インテリ・婦人など、まことに多岐にわたっている。なぜ土佐においてこれだけの民衆が運動に立ち上がったのか。本書は、その物質的基盤として、野中兼山が企てた新田開発と、その上に慣行化した底土持・上土持という土佐特有の土地所有制度に初めて光をあてた。それが農地所有権確立と地租軽減のため広範な農民を運動に立ち上げさせ、また政府の保護干渉、殖産興業政策反対、王権神授説批判、男女同権、自由教育などの要求とともに土佐自由民権の本質的な闘いとなったこと、そのためにまた土佐自由民権運動がブルジョア民主主義運動であったことを見事に論証してみせたのである。

本書によって、土佐自由民権運動の科学的研究の徹底という作業を、全国の「自由民権学界」というきびしい舞台の上ですすめなければならぬという新たな課題が、県内研究者に課せられたといえる。

（高知県議会議員）

慢 白 鰹



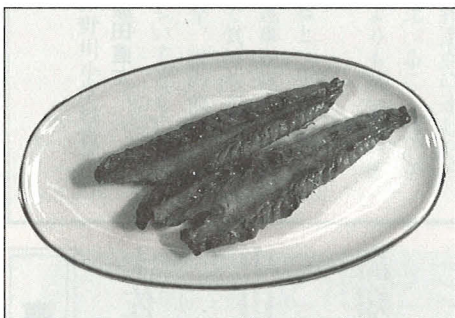
松崎 淳子

つきりと焼け、中はみずみずしい生でなければならぬ。今は焼く前に塩を振る人が多いが、私の母は焼いたあとに切り身に塩を振り、そこへ酢をピチャピチャと叩くように振りかけ、その酢に醤油を足してたれにしていた。作家の大原富枝さんは、ただきだけは人任せにはせず、薬も新薬を高知から送らせて自分で焙して、2cmからの厚切りにたれをかけ、三時間ほど冷蔵してから食べるとか、そのこだわりはなかなか感服した。

る角煮は、焦げる寸前がおいしい。大きくそいで砂糖醤油や味噌に漬けて込んで焼き、山椒のみじん香りをつけるのもよい。さしみの残りや食べる茶漬けが大好きという人も多い。一、二切れ残った身切れを熱い飯に埋めて醤油をたらし、ぐらぐらの湯をかけてさらさらと食べる。わさび、胡麻、もみのりを上にのせたらリッチになる。

〔あら〕 さて、肝心なのはあら。これがあからこそ鰹は楽しい。中骨は関節に庖丁を入れ、たやすく切ることができる。塩焼き、あらだし、味噌汁のだし、筍や大根など煮物のだしには捨て難い味で、ことに私がひそかにねらうのは背骨に沿って通るズイを箸でせせること。魚が新しいほどコクがあるので、期待感でわくわくするのだ。

はらんばは塩焼きにすると酒の肴にばっちり、濃いめの塩で狐色に焼くと旨い。生をせん切りにして酢ものにしてもよい。ちちこ（心臓）



はたくさんあれば振り塩で串焼きもよし、生姜で煎りつけてもよく、シコシコと歯ざわりがよい。わた（腸）は切り開いて庖丁でしごき、濃い塩を仕込んで瓶詰にして酒盗をつくる。一本の鰹ならこれらのあらをひとまとめにして、濃い味であらだしにもする。川村源七さんの『椀と杯』という随筆集には「鰹の頭を茹でて箸でせせるのはなかなかの肴だ」と書いてある。

鰹を釣る漁師たちには、舟上でのいわゆる沖料理がある。土佐清水の吉村馬與さんのお世話で実演してもらったが、舟板を裏返して、おぼろにし、海水をおっかけ、飯炊き用の薪で焙す男の豪快な手料理に圧倒された。中でもたつきは塩だたきで、酢も醤油も使わない。いま釣ったばかりの鰹を切り身にし、焙したさしみに塩を振り、庖丁の腹でバタバタと叩く。箸など使わず、指でつまんでポイと口に放り込む。これがたつきのルーツかも。陸では沖のような鮮度は望めないから、酢醤油なのだろうか、と思った。

（高知女子大学 家政学部教授）

〔身〕

新しければ、まずはさしみ。春鰹の身はピンクがかって軟かく、皮に香りがあって皮つきのまま、秋の下り鰹は魚体が大きく多脂でこってりと旨い。さしみは年中魚屋に並んでいて、脂のりの変化を楽しむが、ひと節を熱湯にさっとくぐらせて水で冷す湯霜、ガスの焔に鉄弓をのせて皮だけ焼く焼き霜もひと味違っていい。でも、何といってもたたきが逸品で焙すことでえも言えぬ香りがつく。焙す素材で風味が決まり、稲藁やかやなら最高、ダンポールならばせめて無地の部分を使う。焼き加減は、切り口の周囲2、3mmがく

別れ そして 出会い

門田雅人

卒業式を間近に控えた三月のある日、「はじめて小鳥が飛んだとき」という詩の授業に取り組んだ。

小鳥が初めて飛ぶということは、巣立ちであり、人生への旅立ちを意味する。息を潜めて見守る親鳥、そして森中の仲間たち。小鳥の小さな胸は期待と不安で高鳴る。見事に小鳥が飛んだとき、森のすべての仲間たちは惜しみなく拍手を送り、祝福した。成長や自立の喜びに溢れた詩である。

昨年度、児童数減少によって休校になった中半小学校から転入してきた美佳さんと千苗さんは、六年生の集団に飛び込んで新しい経験をしたことだろう。そして今度は、九人の仲間全員が揃って卒業という節目を迎える。

卒業を目前にした六年生に、自分の姿と重ね合わせて読み味わってもらいたいと考えた。自分に注がれる温かい眼を意識し、自分の成長の喜びをかみしめるきっかけ

なくて、小鳥の友達や色々な動物たちのことも含めて言っているのではないかと思います。

小鳥はこの時初めて、「ぼくは自由に飛べるぞ!!」と飛んだ実感がわいてきたと思います。

卒業式の日、九人の卒業生は在校生三十五人からの思いの一言をしみじみ聞いた。そして、自分たちも「六年間の思い出と将来への決意」を力強く語った。「成長の記録」の三十枚を基にして、二枚の原稿用紙に決意をまとめて暗唱したのだ。

尚美さんをはじめ多くの女の子は保母か教師になる夢を持っていた。まさんはグラフィックデザイナー、明人君は工業高校に進学して電気工事の仕事をやるという。ただ一人、明彦君は農業後継者になることを胸を張って発表した。大学の農学部に入って専門的に研究をした上で、父親のやっているハウス栽培を発展させたいというのである。

彼等の胸は希望にふくらんでいるように見えた。努力を重ねた上で獲得した自信だったろう。願わくば、彼等の故郷であるこの農山村に愛着を持って生きる子が、二人、三人と続いてほしいものだ。

春休み、卒業した女子全員の訪問を受けた。弁当持参で、私の持つビデオを鑑賞に来たのだ。狭い教員住宅に伸ばしていた髪を肩までに切り揃えた大きな女の子が勢揃いした。中学生の準備といいながら、かえって少し幼く見える。

「火垂るの墓」「となりのトトロ」「風の谷のナウシカ」の三本を泣いたり笑ったりしながら見て帰った。直接の担任として「先生!」と呼ばれる最後だなど感傷的な気分を味わった。

になればいいなと思ったのである。

はじめて小鳥が飛んだとき 原田直友

はじめて小鳥が飛んだとき
森はしいんとしずまった
木々の小えだが手をさしのべた

うれしさと不安で小鳥の小さなむねは
どきんどきん大きく鳴っていた
「心配しないで」と かあさん鳥が
やさしくかたをだいてやった
「さあ おとび」と とおさん鳥が
ぽんと一つかたをたたいた

はじめて小鳥がじょうずに飛んだとき
森は はく手かっさいした

ひと言感想 新玉幸子

小鳥が初めて飛んだ時、すごくうれしかったと思います。この詩に出てくる森がしいんとしていたのは、きっと小鳥が落ちこちるのではないだろうか心配していただと思ひます。それも、きびしい目ではなく温かい目で見守っていたんだと思ひます。

今、私たちは「中学校」という大きな旅に向っています。この鳥もその瀬戸ざわだったんだと思ひます。私は中学校に行けるうれしさと不安とで胸がいっぱいです。小鳥も二つのことで胸がいっぱいだったと思ひます。

はじめて上手に飛んだ時、森も「わー!」とかん声をあげたと思ひます。小鳥もうれしく不安が吹く飛んだと思ひます。やっぱり私は、「森」というのは木だけじゃ

* * *

春の異動時期には、悲しい想いをする人が多い。僻地と呼ばれ複式学級が当たり前の西土佐村では、児童数がさらに減少している。それで、昨年は休校に追い込まれる小学校ができてしまった。今年は二学級になって校長以外に男先生がいない小学校が下家地小と口屋内小の二校もできてしまった。教頭職が引き上げられてしまったのだ。(幡多郡だけでも十校を数えるという。一年と四年の飛び複式なんてどうやって授業を進めるのかしらん。せめて一年生は単式学級にしてやりたい)

西土佐村当局は、村内全部の小学校にプールを作り、どんな小さな学校でも自校式完全給食を実施するなどして、地域の学校を守り育てようとしてきた。しかし、過疎が進行したため、教員定数の改善がなされないという実に厳しい段階を迎えている。

本校は、加配教員の引き上げで四学級編成に逆戻りした。それで、今年私は五・六年の複式学級を担当することになった。五年生は卒業生と比べると丸々二年も差があるわけで戸惑うことが多い。一応の到達点に達した子どもたちと新しい担任の子どもたちを比べることは、子どもたちに対しても失礼だ。そして何よりも弱い自分の気持ちがかくじけそうになる。

「教科書を読んで下さい」と指示すると「先生、教科書読むんですか?」とオウムのような返事が返ってきたりするのである。けれども、実に活発で気持ちが良い。私は、今の教え至上主義である。今、眼の前にいる「この子等を賢くしたい、健やかで優しい子どもに育てたい」と新学期に決意を新たにしている。

(西土佐村立津野川小学校教諭)

事業団の出版物

土佐の芸能

高木 啓夫著
定価四八〇〇円

中山高陽

清水 孝之著
定価三八〇〇円

高知県方言辞典

土居 重俊著
浜田 数義著
定価六〇〇〇円

おらんくごぼてんごもり

定価八〇〇円

土佐自由民権資料集

外崎 光広編
定価三〇〇〇円

明日を創る

大谷 英二著
定価一〇〇〇円

いかにすれば都市の河川はよみがえるか

今井 嘉彦著
定価一〇〇〇円

土佐の自由民権運動

外崎 光広著
定価一〇〇〇円

※消費税は別途申し受けます。

文化セミナー —人と自然と文明—

事業団主催

岩本 久則氏
漫画家

「積み木細工の生き物たち」
5月14日(日) PM 2:30~
潮江市民図書館3F ホール

池田 武邦氏
(株)日本設計事務所代表取締役社長

「藁葺きの家とスペースシャトル」
5月31日(水) PM 6:30~
高知共済会館3F ホール

香原 志勢氏
立教大学一般教育部教授

「人の顔の話」
6月10日(土) PM 2:00~
高知市職員研修所
(電気ビル4F)

※参加費は各回それぞれ300円です。

高知文化の顕現を

第5回高知市都市美デザイン賞講評

山本 忠司

都市の文化について論ずるにあたっては、いろいろ多元的要素が絡み合い、単純な見方・考え方では評価できないのであるが、大切なものは、一つには漏れ溢れるようなエネルギーというか創造への意欲というようなもの、もう一つは、その地域が固有に積み重ねてきた文化の顕現というか、伝統的文化・地域固有の文化の現代への参加ということが考えられよう。

それら両面での高知文化を、具象の世界を通じて評価し、顕賞しようとするのが、「高知市都市美デザイン賞」の意味するところであろうと理解する。

高知には、高知で生れ育ち、中央に出て教育を受け、そのまま中央に残るのではなく再び高知に戻り、ここを舞台として仕事をしている若者が多い。都会でいくら頑張ってみても、あまりにもその舞台が大きかつ役者も多過ぎる、所詮は巨大なメ

カニズムの中に埋没してしまい自己を顕現することができない、それならば高知で、という想い。もう一つは、出生した土地を愛する気持ち。その双方が、現代の高知文化を生き生きと支えているのだと感じる。

もう一つの、地域の特性を生かす伝統的文化の顕現ということは、言うは易く、それを実際の都市空間の中に生かすということは、日本中どここの地方都市についても大変に難しいことである。その結果として、津々浦々どこへ行っても同じような建築、まちづくりになってしまおうというのが現状かと思われる。

西欧の場合、石造文化であるから、まずその耐久年限が長い。しかも今のように伝達機能が発達していないか。つた時代には、地方特有の手法や様式がそのままの姿で教百年もの間残された。その結果、現在もなお個性ある都市として存在している所が少なくない。

ところが、日本のように木造文化だと、ハードな文化が長く残らない、すなわち回転がはげしい。したがって、個性ある地域文化が存在しにくいという結果となるのである。

しかしながら高知の場合、地場の伝統的手法である土佐漆喰を使って住宅をある程度現代風に置きかえたり、それを現代建築の中にまで導入して土佐特有の趣きを表現したり、土佐特有の水切り手法を今のデザインの中に取り入れられたりして、伝統の継承に努力している。

これらは、地方都市の個性を守り、文化の画一化から地方都市を救う意味で尊重されるべきことと考える。さらに、これらの手法がこれからの現代建築の中にも大いに導入されるならば、地域の個性が出て面白いものになると思われる。

▼島村写真館

合資会社上田建築事務所 上田 堯世

この建物は、道路から一歩後退し、そこをサンクスガーデン⁽¹⁾的な扱いとし、併せてディスプレイ空間としての使用も建築のファサード⁽²⁾との調和もうまくいっている。このような試みは、施主である建築主と設計を担当する建築家の呼吸が余程うまく合っていないと実現しにくいところで、その双方の努力を評価したい。

▼ASTIR121ビル

田村雄一建築設計事務所 田村 雄一
帯屋町のアーケード街の一角に商

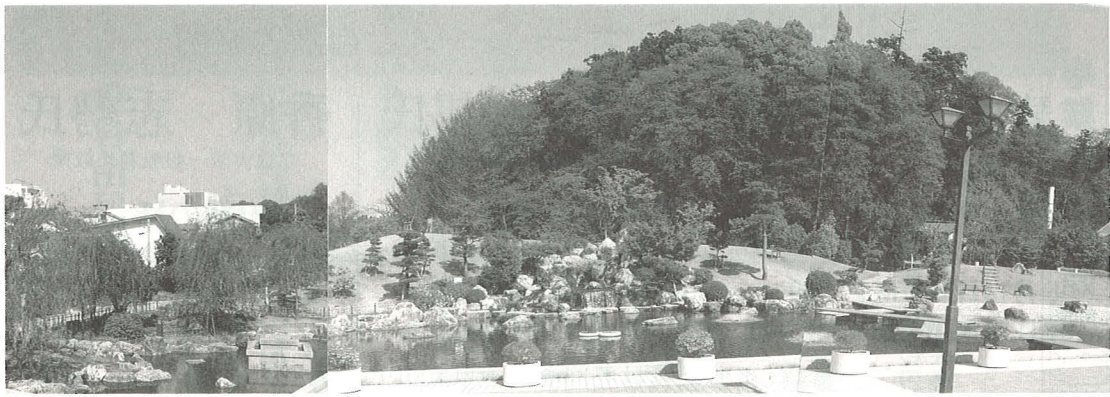
業建築として建てられたASTIRビルは、それに隣接する植野ビル、くずめビルと一体となつて、商店街の都市空間を新しいものとしている。特にASTIRビルの空間の切り方は、ともすれば都市空間が小作りになりがちな点をうまく救っている。

▼城西公園の日本庭園と桜並木

日本技術開発株式会社
高知市が時間をかけて取り組んできた成果としての公園。築山のある日本式庭園は、背景となっている城

の樹木をうまく生かし、石組み、滝なども巧みに構成している。ただ、それを眺めるスペースがタイル貼りとなっていることは、向うにある伝統的作庭の手法とかけ離れていわゆる洋式となつており、手法の一貫性ということから考えて残念なところである。

また、この公園の中にはフェンスで囲まれたグラウンドもあるが、このように都心部に近い公園の性格から考えると、誰もが気軽に使うことのできる公園であり、緑地広場である



城西公園内日本式庭園

ことが好ましい。もし、周囲を樹木で囲まれたその場所が芝生広場で構成されていれば老若誰もが気軽に使える、しかも周囲の公園の環境にも溶け込む。すなわち一体となることのできるわけで、それは視覚的にも好ましいものと思われる。

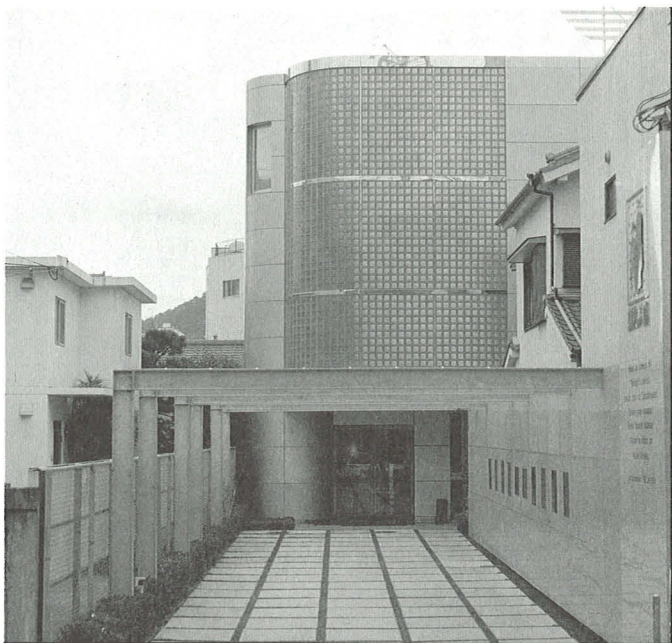
公共の仕事なので大変難しいことはよく分かるが、できればタイル貼りを石貼りに替え、築山と滝を見るスペースを日本式に造り、フェンスで囲まれたアンツーカー⁽³⁾の運動場についてはフェンスを撤去して芝生の広場とすれば、公園全体が格調高いものとなり、かつ市民にもより親しまれるものとなると見受けられたのだが……。

(新日本建築家協会四国支部長)

注(1)地面より低くなった庭。地階に光を採り入れるのに有効。

(2)正面・外観

(3)水はけのよい人工土を敷いた競技場の走路。



右・ASTIR121ビル
上・島村写真館

第5回都市美デザイン賞に市民の皆様より三十六件のご推薦を頂きました。予備選考・本選考の結果、今回はこの三件が入選と決定いたしました。ご協力、本当にありがとうございました。

短歌習習

田村 満智子

私が短歌を作りはじめたのは、学生時代の終り近く、時代は戦後文化の開花期、昭和二十年代の後半だった。欧米文学の乱読、総天然色のアメリカ映画への没頭、更には演劇部で、シェイクスピアの『リヤ王』、『マクベス』の公演という異国文化の波間を漂いながら偶々、すすめられるままに「明日香」に入会した。どうしても短歌を作りたいという意欲、必然性からではないままに、断続しながら、気がつくとき長い歳月の間に、いつの間にか離れられないものになってしまった。時の移ろいと主婦という現実の枠のなかで、形而上的なものへの試行は、一つ一つ消去されてゆき、最後に残されたものが短歌であったのかと気づくところである。

は欧米では全く考えられない。詩としての芸術性、質はともあれ、『万葉集』以来、日本人には、誰でも自分のおもいを三十一音に托する素地が受け継がれ、七五調のしらべは話言葉にも文章にもその底に定着している。中国からの漢字、欧米の横文字をつぎつぎと自由自在に取り入れて、日本語は常に変容し、短歌の形もまた様々に変わりながら、根元的には『万葉集』と全く同質のものといえよう。

私の短歌も何かに揺さぶられて作歌意欲が湧き、触発された感動から引き出される。自然の美しさに打たれ、おどろき、また社会や人とのかわりのなかで、はっと立ちどまり対象の本質、いわば核を探ってゆくことから始まる。私にいま一番大切なものは何かと自己のうちに深く入

っていつ探りあて、ぼんやり見えてくるものを把握しなければならぬ。四方の闇のなかで、数学のように正しい解答が一つだけ出てくるものではない。ただ自分と向きあうことで何かを見ることが出来る。或はいま生きていることを確かめるためかも知れない。

そしてそれは三十一文字に定められているため、非常に制約された表現が求められる。絶対に必要なものだけを選び、それが不必要か、どうしても除きたくない、削ることはできないと思う言葉をも惜しみながら捨ててゆくうちに、たった一つしかない光る様な語句に出逢う。ようやく形が整ってから、しばらく寝かせて発酵させる。時をおくと、無理な表現、必須でない言葉は浮かびあがって見え、それを削りなおして、はじめて一首が出来上がる。

夢のみに迷ぎて見えつつ小竹島の
破越す波のしくしく思ほゆ
(二二二六)

この『万葉集』の一首で、作者の言おうとするのは「しくしく思ほゆ」であろう。逢うことが出来ない人を夢の中でのみ見ながら、「小竹島の破越す波の」と歌うことで、単なる幻想ではなく具象性をもたせ、

波の白い飛沫があがるのが目に見える見事な描写。小竹島には、自づからしのおとという連想が伴い、「しくしく」は、しくしく泣くのように、抑えようとしても後から後から涙が出てとまらない、と同じで、次から次へと絶え間なく波が押し寄せてくる様に、恋人のことが思われてならないという意味である。

現代の短歌にはこういう形のものはない、もう見られない。終りの七文字を除いては、現実に今見ている風景を述べているのではなく、「しくしく思ほゆ」を導き出すためのものに過ぎない。遠い時間を距てながら、作者の思いは私達の胸にひたひたと迫り、深く共鳴する。古語の美しさを探り、今日の日本語を守ってゆくことが、短歌にかかわっている私達の手にはいま委ねられているのだからか。

三十余年つづけてきた短歌をつくる作業が日常生活に浸透してきて、いろいろな生活の場面で、一番大切なものは何か、それが不要で何が絶対必要かを、知らず知らず判断している。短歌にかかわっている故に、対処すべきことよりの確な選択が出来るようになったのかとも思われる。
〔「明日香」高知支部長〕

私の風景

田中 一郎

一文橋の通り

比島に住んでいた頃、子ども達と一文橋を渡り、この道を通って魚釣りに行った。昔は城下に入る重要な街道だったと聞く。今、土佐道路から鏡川大橋、さらに北へと抜ける道の計画もある。昔も今も、また明日も重要な道である。



衣・食・住の中で毎日欠かすことのできない食。最近はグルメ志向が強まり、家庭でも美しく盛りつけられた料理の皿が何枚も並ぶ。食事の後の流しには、汚れた鍋と皿の山。しかも食生活の欧米化にともない油污れが俄然増えてきた。今、スーパーの棚には「マレモン」「チエリーナ」「ファミリアフレッシュ」「ルナマイルド」「ルナクリスタ」の、何十種類もの台所洗剤が所狭しと並ぶ。中には、湯で溶かし、三十分程漬けておくだけで油污れから茶渋まで取れる、後はすすぐだけというものもある。その名も「あつこかたづけ」。

現代風俗を考える〈1〉
食器洗い

それでもまだおさまらない。すすいだ後、拭くのが面倒と食器乾燥機ができ、それならいっそ全部やってくれるものをと自動食器洗い機なるものが登場した。

ほんの三、四十年前までは、使う皿数も少なく、洗うのも簡単だった。茶碗などは食べ終わった後、熱い茶を注ぎ、箸で掻き回し、茶碗と箸の汚れを同時に取り、茶を飲み干すとそのまま各人の引き出しなり膳に納めた。洗うにしてもほとんど

陶器ばかりでなく、木・竹・漆・貝 etc.、様々な材質の器を生活に取り入れている日本では、万能食器洗い機よりも自分の手で洗うのが一番ということになるのか。それも、汚れに応じて洗剤も最小限度に抑え、食器ばかりでなく川もきれいにしたいものである。

水洗い、油污れ、茶渋、煤などは、チヨツチヨツとカマドの灰をたわしに付けて洗い落とした。

クレンジーの登場は画期的なものだった。田舎では「磨き粉」と呼ばれ、何でもピピビになる魔法の粉だった。そして、嬉々として磨き上げた結果、ガラスや茶碗には無数の細かいキズがつき、鍋の底はどんどん薄くなっていったのである。

それから程なく液体中性洗剤の時代が到来する。

何と便利になったことか、いや待てよ。ここ数十年の「食器洗い」の進歩と合理化は、油污れの皿の数を何倍にも増やし、洗剤の使用量を増やし、すすぎの回数と水の消費量を増やし、排水による水質汚濁は大きな社会問題

俳句文芸の普及と向上

川島 背戸

俳句連盟は昭和四十七年に創立された。その主旨は、俳壇の各流派が合同し、県下の芸術祭、文化祭に参加して各地の俳句大会を開催、また出版その他の事業により俳句文芸の普及と向上を図り、県民文化の向上と推進に寄与することにある。現連盟役員十七名、常任委員ならびに支部長六十名、委員九十九名、会員五百四十二名。県下で最も多くの会員を擁する文芸団体である。

主催・後援等の行事は、東部・西部の俳句会、空海祭、龍馬祭、お城祭、足摺椿祭、名月酒供養大会などである。また、俳句展により会員の作品を公開展示、旅行者との交流を図るために俳句ポストの設置・運営も行っている。

昭和六十二年には「高知県昭和俳句集」を編集刊行して県出版文化賞を受賞。これは昭和の俳句を後世に遺す主旨のもので、入集された俳人数は千三百九十名、句数は一万六千余句で、実に空前のアンソロジーとなった。引き続き、創立二十周年の記念事業として「土佐俳句歳時記」の出版を



かがし座

郷土芸能を伝承しつつ

中山 美智子

私たちの祖先が、労働や生活の中から創り育ててきた芸能を少しでも伝承していこうと、十八年前「かがし座」が生まれました。中心の活動は、日本各地の祭囃子の演奏と西畑人形芝居の伝承を中心に活動を続けています。



私たちが現在私たちが演奏しているのも、秋田の飾山ばやし、千葉の佐原ばやしといった他県のもが主です。ですから、お囃子に関しては、伝承とともに、土佐の新しい祭囃子を創り出していくことも必要だと思えます。西畑人形芝居は、明治の初め頃、春野の西畑で生まれたといわれる土佐独特の人形芝居で、農民が仕事の余暇に、卵に目や口を描いてふすまの陰で踊らせたのが始まりとか。その後、人形の頭や手に差し金を付けて使うというようなくふうを重ね、義太夫や時には浪花節に合わせ

高知アララギ

高知のアララギ四十余年

楠瀬 兵五郎

この三月で三三五号になったので、この薄っぺらな短歌誌もいつの間にか年を重ねたことになる。高知でアララギの間が結果して雑誌を持ったのは昭和二十年、安芸の三宮幸十郎を中心に「ひはりを創刊、それが始まりだ。岡崎ふゆ子の「はまゆふ」の創刊が続いた。その後十三年間、「はまゆふ」の廃刊、「あかつき」との合併、「炎」を経て、「高知アララギ」に落ち着くまで曲折があった。戦場から、療養所から帰ってきて、食の乏しい時代に焼酎を飲みながら、夜を徹して文学や生活を語ったあの情熱と若さは遠い昔のこととなったが、生き残った各々の身体はどこかに染み込んで、この小雑誌を支える力になっている如くである。

「アララギの写実の歌が性に合うチョール」あつちこつちの良い所を取っていった器用さはイヤ「主宰や宗匠は置かん」「雑誌は修練の場、出した作品はどしどし落してくれ」そんな連中が揃っていると言え、やはりいっつとはちきんの集まりか。それでも歌はやさしい。「午後よりを励みて打ちし一枚の誤点に気付く夕暗むとき」吉田敏之。「音たてて庭の紅葉に降るしぐれ腰痛む夜に覚めて聞きをり」小松もとみ「けものらも鳥らも寄り来るこの峯の田にわれらに余る脱殺すみたり」坂上のおる「百二

くさい仲間

誰もがその道のプロ

兼松 方彦

国民休暇県・高知にあって、4K(臭い、恐い、暗い、汚い)を完備し、とりわけ強烈なおいを放っている公衆トイレ。みんなから迷惑がられ、とかく日陰者扱いされている。この公衆トイレを、日なたに引っ張り出し、みんなの目を向けさせ、少しでも良くしていこうと集まったのが「くさい仲間」です。

現在、仲間は十二名。高知医大の鈴木了司教授を顧問に、会社員、新聞記者、出版社の編集長と編集員などバラエティに富んだメンバーで、時には多くの友人の手を借りて活動をしています。これまでに、「トイレカルテ」づくり、高知城公衆トイレ実態調査、トイレ利用者アンケート「二〇〇人に聞きました」、四国霊場八十八カ所実態調査(県内七カ寺実施)、シンポジウムへの参加、お花見調査などを行ってきました。

今後は、「一日そうじ体験」「障害者の不便さを知る」「モデルトイレ作り」などを行っていく予定です。トイレは誰でも日に何回となくお世話になるものです。言うなれば、誰もがその道のプロ。会合は、そんなプロが自分の体験、とりわけ失敗談などをワイワイ話すことから始まります。自分の体験が基にあるので、話にも自然と熱が入ります。みなさんもトイレに対する不満、希望など話し合ってみませんか。子どもか

散歩の途中で



江戸末期の農政家二宮尊徳、通称金次郎の像は勤勉、積善、節儉の象徴として、昭和十年代には日本全国の小学校で次々と建てられた。しかし、戦後の民主化政策の中で徐々に壊され、今残っているものは数少ない。写真は、大津小学校グラウンドのものだが、本を持つ手が落ちていたのは何ともさげすましい。

計画、現在、編集委員会により広範な準備作業が進められている。

各会員には会報を通し、連盟俳壇による選句発表、各地俳句会の紹介、新刊句集の鑑賞など高知俳壇の情報を提供している。

なお、俳句連盟には、俳句を作らない人でも入会して会報の配布を受けることができますのでお問い合わせ下さい。

(高知県俳句連盟会長) 連絡先 四四一〇八七一 (県俳句連盟)

て芝居をしたそうです。

今、伝承しているのは「かがし座」だけですが、一時は数多くのプロの一座が演じていたようです。鏡川まつりなどで公演していると、「昔よう見たが、なつかしい」「昔のとちよつと違う」などと言つて下さる方もいて、教えて頂くことも多く、地味ながら伝承していくことの楽しさを味わっています。

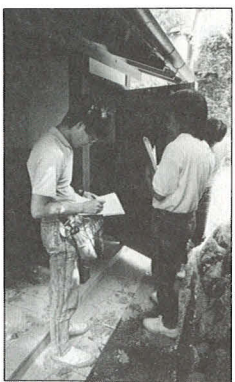
(三味線・義太夫担当) 連絡先 高知市本町五丁目三一―二四 七二―七三三五(かがし座)

十巻読み解く仕事手伝ふと今日より勢ふに吾れ七十一歳」小松栄次

高知市月例歌会は、第二土曜日一時半より西奏泉寺の岡林化粧品店(七三―五五六)で行っている。高知アララギ会は、規定の会費を納めれば誰でも入会することができ、短歌、批評、随筆等を投稿することができる。興味のある方は一報を。

(「高知アララギ」発行人) 連絡先 香美郡土佐山田町 北本町一―二四四―五 (〇八八七五三―五四三三五)

ら老人まで幅広い活動になることを願って、地道な活動をこれからも続けて行きたいと思えます。



連絡先 二四一―七七三 (若竹まちづくり研究所内)

風伯

都市美をコーディネートする

建築を仮設化してきているためだが――。上田篤先生(ゲスト審査員)は、「そのフロアの建築が、いまはコンクリート造りなどのストックの時代となってしまった」と逆説的に説明している(国際的な画一性に対して)。だがもうそろそろ、この高知という建築文脈のなかで、高知らしさというアイデンティ

ティを確認する必要がある。東洋的な輪廻転生という文化思考のなかで、伝統に対する模倣や保護ではなく再生の美学を追求する時代であろう。

高知は、トラック競争での一周遅れのランナーである。だが建築文化は距離とスピードの競争ではなく、その場所での現在を評価しなければならぬ。都市建築の状況は新しいものを求めるだけでなく、もっと意味深長であるはずである。

今回は、特賞を選考することができなかった。しかし、もう地域建築家はル・コルビュジェのいう「技師の美学」を理解しており、高知という都市での人間・時間・空間を読みとって表現できる能力をそなえている。われわれは、次には地域建築家の広い視野による都市コーディネートとしての実践結果を期待している。

(伊藤 憲介)

POLYGRAPH START'89

〈会期〉

1989. 5. 18(木)
～6.4(日)

〈場所〉

県立郷土文化会館
(月曜日休館日)

〈時間〉

午前9時
～午後5時
(最終日は4時まで)

〈出品者〉

〈県外〉

井川 惺亮
池田 丈一
石井 理之
大島 克文
金谷 敬和
川島 慶樹
田中 坦三
松宮 喜代勝
持田 総章

〈県内〉

入交 京子
上田 祐嗣
小原 典子
門田 修充
高崎 元尚
玉造 義隆
都築 房子
藤崎 幸雄
山崎 道

事業団発足5周年記念文化講演会

日本の自由、
世界の自由

高知市制100周年を迎えた今年、高知市文化振興事業団も発足5周年を迎えました。

自由民権発祥の地、この土佐でいま「自由な私」をテーマに数々の100周年記念の事業が展開されています。この記念すべき年に西島安則京都大学総長を迎え、自由、をテーマにご講演いただきます。皆様方多数のご来聴をお待ちしています。

講師：西島 安則氏
(京都大学総長)

〈日 時〉 1989. 5. 24 (水)
午後2時～4時

〈場 所〉 高知会館 2階ホール
〈参加費〉 無料

申し込み・お問い合わせ

〒780 高知市本町5-2-3
(財)高知市文化振興事業団
TEL (0888) 73-4365

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780 高知市本町五丁目二番三号

TEL (〇八八八) (7) 四三六五

郵便振替 徳島8-14869



ミュージカル・RYOMA
Tシャツができました

10月公演に向けてレッスンに励んでいる「劇中はんどれっど」では、ミュージカルのPRのためにTシャツをつくりました。白地に鮮烈な赤をあしらひ、幕末の薩長士の激しいせめぎあいをイメージしてデザインされたこのTシャツを1,500円で販売します(送料250円、サイズはLのみ)。高知の若者100人が挑戦するミュージカル・RYOMAを、あなたも応援して下さい。お求めは文化振興事業団まで。